



## 新たな出会いを旅と共に

春は、新たな出会いそして別れの時でもあります。  
まだ見ぬ新しい世界を自身で感じることも、旅行の醍醐味です。  
今まで過ごしてきた日常と異なる瞬間を感じることは  
素敵なことではないでしょうか。

日々の中でもたくさんの出会いがあります。  
地域・文化・人との出会いをJTBは大切な時間と考えています。  
これからの日々が、素晴らしい出会いに満ち溢れたものとなりますように。

私たちJTBは新たな出会いを共にする旅のお手伝いをいたします。

(株)JTB大阪第二事業部

〒530-0004  
大阪市北区堂島浜 1-1-27 大阪堂島浜タワー7階  
TEL: 050-1732-4529(代) FAX: 06-6676-8964  
担当: 岡田 悠

## CONTENTS

- |                                |                            |
|--------------------------------|----------------------------|
| 1 第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ 開催特集   | 11 続 そりがききたい! 室内楽コンクールのナゾ  |
| 3 第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ スケジュール | 13 ベートーヴェン後期弦楽四重奏曲の聴きどころ   |
| 5 コンクール参加団体紹介                  | 16 プロデューサーが往く! アムステルダム     |
| 6 フェスタ参加団体紹介                   | 17 グランプリ・コンサート2025レポート     |
| 7 コンクール審査委員&フェスタ特別審査員紹介        | 19 作曲家の部屋 vol.7 メンデルスゾーン   |
| 8 対談 野平一郎(作曲家・ピアニスト)×酒井健治(作曲家) | 21 トップアンサンブル シリーズ2026-2027 |

# 2026年5月、「第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」を開催!

2026年3月24日に、「第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」の開催記者発表を行いました。「大阪国際室内楽コンクール」は、室内楽に取り組む若い演奏家を広く世界に求め、優れた演奏を顕彰するとともに、国際交流を促進することを目的に開催します。「大阪国際室内楽フェスタ」は、クラシック音楽はもとより民族音楽や伝統楽器も対象とし、審査は聴衆の投票によって行われる、世界にも類を見ない室内楽の祭典です。コンクールとフェスタ合わせて、世界25カ国・地域/135団体から応募があり、映像による予備審査を経て、17カ国・地域/32団体の参加が決定しました。コンクール・フェスタともに審査演奏はすべて一般公開され、一部の審査を除きYouTubeでの生配信も行います。またメイン会場となる住友生命いずみホールを飛び出して地域でのコンサートも開催します。

そして、記者発表と同日に、第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ特設ウェブサイトもオープンしました。最新情報はこのサイトのほか、SNS(X、Instagram、Facebook)でも発信します。今回は世界からどのような精鋭が集うのか、「第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」にご期待ください。

<https://jcmf.or.jp/12thcompetition-festa/>



特設サイト

## 大阪国際室内楽コンクール&フェスタ 開催



【登壇者】  
 開催委員会会長 松本 正義 (日本室内楽振興財団会長、関西経済連合会会長)  
 開催委員会副会長 松田 陽三 (日本室内楽振興財団理事長、読売テレビ放送代表取締役社長)  
 フェスタ特別審査員代表 呉 信一 (トロンボーン/京都市立芸術大学名誉教授)  
 運営本部長 藤門 浩之 (日本室内楽振興財団常務理事)  
 大阪国際室内楽コンクール&フェスタプロデューサー 河井 拓 (日本室内楽振興財団)

数字で見る  
第12回  
大阪国際室内楽コンクール&  
フェスタ

国・地域数	応募	参加
コンクール第1部門	14	6
コンクール第2部門	16	6
フェスタ	21	9

団体数	応募	参加
コンクール第1部門	30	8
コンクール第2部門	46	8
フェスタ	59	16

### 【審査委員長】モニカ・ヘンシェル(ヴィオラ)

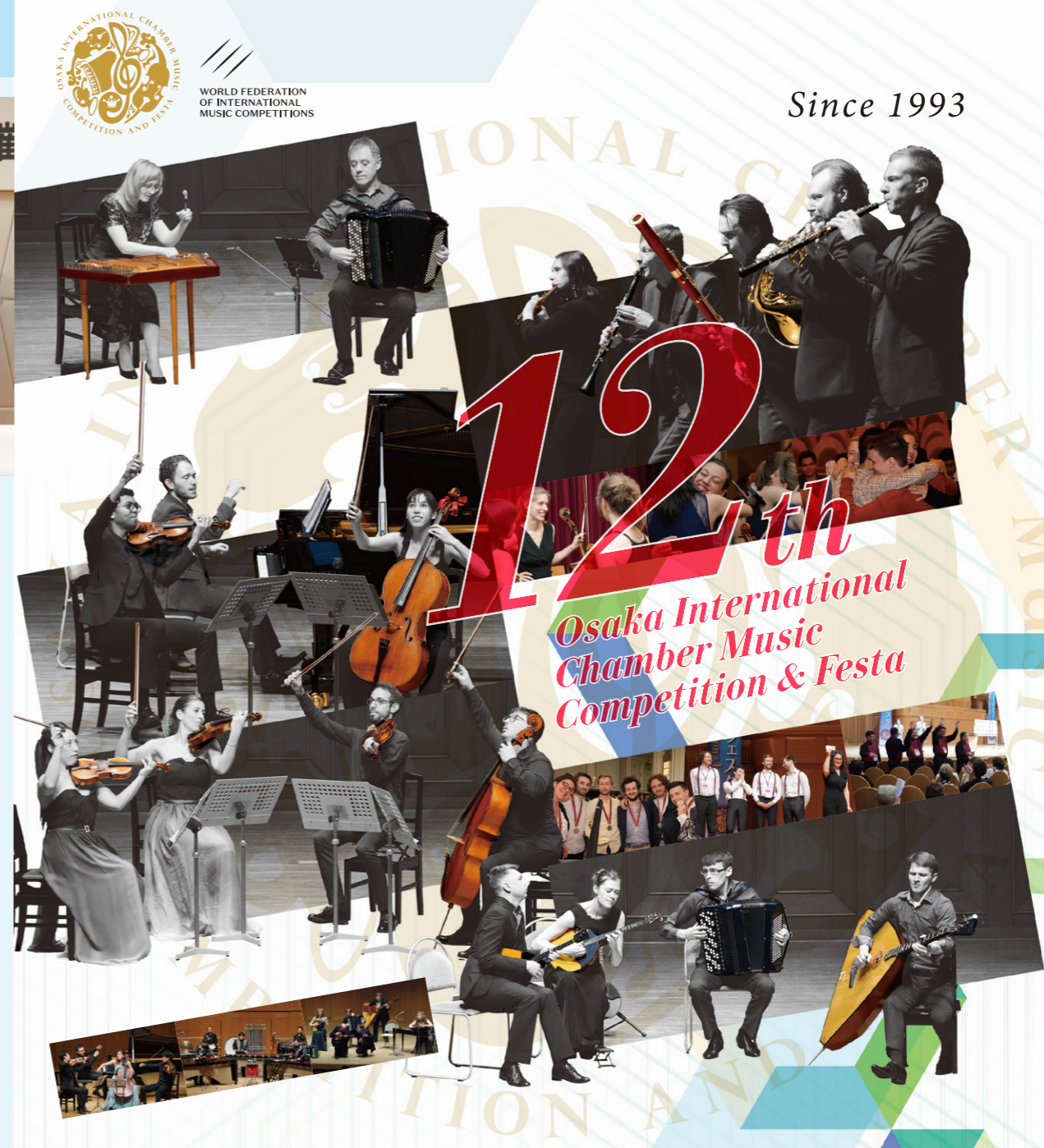
大阪国際室内楽コンクールは、30年以上にわたり、世界でも特に重要で先見性のある室内楽コンクールの一つとして続いてきました。審査員は国際的に活躍する室内楽奏者9名で、過去の第1位受賞者も務めます。私自身も大阪で第1位を受賞した経験があり、このコンクールが若いアンサンブルにとってどれほど大きな意味を持つか実感しています。5月に大阪で素晴らしい音楽と人々に出会えることを楽しみにしています。



© Stefanie Roth

### 【フェスタ特別審査員】呉 信一(トロンボーン)

大阪国際室内楽フェスタ最大のポイントは「多様性」です。フェスタは課題曲がなく楽器編成が自由で、音楽ジャンルも幅広く、全団体を全く同じ条件で審査することはできません。ビデオによる予備審査では採点は行いましたが、点数だけで決めず、審査員全員で各団体について協議しました。本番では幅広い音楽を皆様にお楽しみいただけると幸いです。



12<sup>th</sup>

Osaka International  
Chamber Music  
Competition & Festa

フェスタ	2026.5/9(土)~13(水) 2~6名の器楽アンサンブル
コンクール	2026.5/17(日)~24(日) 第1部門 弦楽四重奏 第2部門 ピアノ三重奏/ピアノ四重奏

室内楽に熱心に取り組む若手演奏家たちの発表の機会を作り、日本での室内楽振興を図ることを目的に、1993年から3年ごとに開催してきた「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」。初回開催から33年の時が経った2026年、第12回目を開催いたします。今年とはどんな熱いステージが繰り広げられるのか——演奏はすべてホールで聴衆に公開され、世界で活躍する選りすぐりのアンサンブルによる演奏を一挙に堪能するまたとないチャンスとなります。会場やオンライン配信でぜひ、室内楽のいまを感じてください。

【主催】公益財団法人 日本室内楽振興財団 【共催(フェスタ1次ラウンド)】公益財団法人 富山県文化振興財団/公益財団法人 三重県文化振興事業団  
 【後援】外務省/文化庁/大阪府/大阪市/日本演奏連盟/住友生命いずみホール/関西経済連合会/大阪ビジネスパーク協議会/読売新聞社  
 【協賛】岩谷産業/NTT西日本/大阪ガス/大林組/鹿島建設/関西電力/きんでん/サントリーホールディングス/JR西日本/JTB/清水建設/住友生命/住友電気工業/積水化学工業/千趣会  
 ダイキン工業/大成建設/竹中工務店/日建設計/ハウス食品グループ/非破壊検査/フジテック 【フェスタファイナリスト賞サポート】一般財団法人 小野文化財団 【賛助】読売テレビ  
 【提携協力】Britten Pears Arts/Music in PyeongChang/Quatuors à Bordeaux/ String Quartet Biennale Amsterdam  
 Verband der Streichquartette und weiterer Kammermusik-Ensembles VdSQ e.V. & Förderverein Festival4 e.V./KLANGERLEBNIS e.V. 【特別協力】一般社団法人 MK記念会

## 第12回 大阪国際室内楽コンクール&フェスタ

# 5つのポイント

- 01 POINT

**過去の優勝団体からの審査委員招聘**  
 過去の大阪国際室内楽コンクール優勝団体のメンバーから審査委員を2名招聘します。
- 02 POINT

**大阪から新たな弦楽四重奏作品を発信**  
 コンクール第1部門3次ラウンドの課題曲として、国内外で評価が高まる作曲家、酒井健治による弦楽四重奏曲第2番「フローティング・パーティクル」(第12回大阪国際室内楽コンクール委嘱作)を設定します。

- 03 POINT

**海外の室内楽コンクールやフェスティバルとの提携協力**  
 5カ国6つのコンクール・フェスティバルと提携し、各特別賞に選出された団体を現地に派遣することで、コンクールの入賞後もキャリア支援を行います。
- 04 POINT

**前回に引き続き、フェスタ1次ラウンドを富山と三重で開催**  
 フェスタの演奏を大阪以外の身近なホールで楽しむ機会を提供することで、広く事業の魅力を伝えます。
- 05 POINT

**「Ensemble SHOWCASE」を初開催**  
 惜しくもセミファイナルラウンドへ選出されなかったフェスタ参加団体は、住友生命いずみホールでのコンサート「Ensemble SHOWCASE」に出演します。世界から集まった多様な音楽により多くの披露の機会を設け、フェスタ期間の最後まで大阪に滞在してもらうことで参加団体同士の文化交流を促します。

第12回大阪国際室内楽  
コンクール&フェスタ  
開催!

## コンクール 5月17日(日)~24日(日)

### 音楽家の育成を目的に「音楽の原点」を求める国際コンクール

「大阪国際室内楽コンクール」は、室内楽に取り組む優秀な音楽家を世界に広く求め、優れた演奏を顕彰し、人材を育成するもので、「国際音楽コンクール世界連盟」の基準に基づいて運営します。コンクールは3年に1回行われ、第1部門は弦楽四重奏、第2部門は様々な編成を経て現在はピアノ三重奏／ピアノ四重奏が対象となっています。取り組む課題曲も幅広く、世界から集まった精鋭たちによる室内楽の“今”を聴くことができます。

賞金 各部門	 <b>第1位</b> <b>250万円</b> 	 <b>第2位</b> <b>120万円</b> 	 <b>第3位</b> <b>80万円</b> 
特別賞	以下の各賞を受賞した団体は、各地で行われるフェスティバル等に出演する権利を得ます。		
	 <b>ブリテン・ピアーズ・アーツ賞【イギリス】</b>	 <b>第12回大阪国際室内楽コンクールアンバサダー賞【ドイツ】</b>	
	 <b>ミュージック・イン・平昌賞【韓国】</b>	 <b>クランゲルレブニス賞【ドイツ】</b>	
	 <b>ポルドー弦楽四重奏フェスティバル賞【フランス】</b>	 <b>MK記念会特別協力</b>	
	 <b>ストリング・カルテット・ピエンナーレ・アムステルダム賞【オランダ】</b>	※上記の特別賞を授与されフェスティバル等に参加する団体には、一般社団法人MK記念会からの寄付金を財源として、交通費の一部が補助されます。	

### 審査演奏

第1部門：弦楽四重奏

第2部門：ピアノ三重奏／ピアノ四重奏

5月17日(日)	第1部門 1次ラウンド	10:00~19:45	8団体	※コンクールの審査はすべて住友生命いずみホールで行います。	▶	
5月18日(月)	第2部門 1次ラウンド	10:00~19:45	8団体			▶
5月19日(火)	第1部門 2次ラウンド	10:00~20:15	8団体			▶
5月20日(水)	第2部門 2次ラウンド	10:00~20:15	8団体			▶
5月21日(木)	委嘱作曲家・酒井健治氏トークセッション、第1部門 3次ラウンド	10:10~17:20	5団体			▶
5月22日(金)	第1部門・第2部門 ファイナルラウンド	10:00~17:50	各3団体			▶

▶=YouTube生配信・アーカイブあり

### 披露演奏会

大阪公演はコンクール第1部門・第2部門の1位~3位入賞団体、東京公演はコンクール第1部門・第2部門の1位受賞団体が出場します。

5月23日(土)	入賞団体披露演奏会(大阪)	14:00~18:00	6団体	住友生命いずみホール	▶
5月24日(日)	優勝団体披露演奏会(東京)	14:00~16:00	2団体	サントリーホール ブルーローズ(東京都港区赤坂1-13-1)	▶

▶=YouTube生配信・アーカイブあり

## 第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ スケジュール

### フェスタ 5月9日(土)~13日(水)

#### 年齢制限なし! 課題曲なし! 一般審査員が賞を決めるユニークな音楽祭

ヴァイオリニストで教育家のユーディ・メニューイン卿の提唱により、大阪国際室内楽コンクールとともに始まった大阪国際室内楽フェスタ。年齢制限や課題曲がなく、楽器の種類や編成も自由です。このため、クラシック音楽はもとより、世界各国の民族楽器も対象となります。

1次ラウンドを富山・三重で、セミファイナル・ファイナルラウンドを大阪で開催。一般審査員の投票によって審査が行われる、世界でも他に類を見ないユニークな音楽祭として、国際的に広く知られています。

賞金	 <b>メニューイン金賞</b> <b>100万円</b> 	 <b>ファイナリスト賞</b> supported by Ono Culture Foundation (3団体) <b>各30万円</b> 
特別賞	セミファイナルラウンド出場団体から特別審査員の協議によって各1団体に授与	
	 <b>フォークロア賞</b> ..... <b>10万円</b>	 <b>パーカッションアンサンブル賞</b> ..... <b>10万円</b>
	 <b>キーボードアンサンブル賞</b> ..... <b>10万円</b>	 <b>ウィンドアンサンブル賞</b> ..... <b>10万円</b>
	 <b>ストリングアンサンブル賞</b> ..... <b>10万円</b>	 <b>ニューウェイブ賞</b> ..... <b>10万円</b>

### 審査演奏

5月 9日(土)	1次ラウンド(富山)	10:30~18:00	8団体	富山県高岡文化ホール(富山県高岡市中川園町13-1)	
	1次ラウンド(三重)	10:30~18:00	8団体	三重県文化会館(三重県津市一身田上津部田1234)	
5月12日(火)	セミファイナルラウンド(大阪)	10:00~17:00	8団体	住友生命いずみホール(大阪市中央区城見1丁目4-70)	▶
5月13日(水)	ファイナルラウンド(大阪)	14:00~17:30	4団体		▶

▶=YouTube生配信・アーカイブあり

### Ensemble SHOWCASE

富山・三重の1次ラウンドから惜しくもセミファイナルラウンドへ選出されなかった団体は、大阪でのコンサート「Ensemble SHOWCASE」に出演します。

5月11日(月)	Ensemble SHOWCASE #1	19:00~21:00	4団体	住友生命いずみホール	▶
5月12日(火)	Ensemble SHOWCASE #2	19:00~21:00	4団体		▶

▶=YouTube生配信・アーカイブあり

## 第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ 地域プログラム

### 大阪チェンバーミュージック・ホライズン



2023年の10plazaでのコンサートの様子

室内楽の祭典として発信すべく、大阪国際室内楽コンクール参加団体が住友生命いずみホールを飛び出し、地域と協働したコンサートを開催します。詳細はウェブサイトをご覧ください。

#### 1 読売テレビ 10plaza

**5/20(水) 5/21(木) 12:30開演**

入場無料、予約不要

会場：読売テレビ 10plaza

(住友生命いずみホールより徒歩3分)

主催：公益財団法人日本室内楽振興財団、読売テレビ

#### 2 今福音楽堂

**5/21(木) 19:00開演 チケット 500円(自由席)**

会場：今福音楽堂

(大阪市城東区今福東1-10-5 今福ファミリータウン3階)

TEL: 06-6167-7242

主催：公益財団法人日本室内楽振興財団、一般社団法人Reise

### チケット情報

#### 審査演奏(コンクール・フェスタ)

各日程 全席自由 **500円** 各ホールでの当日販売

※ただし、1次ラウンド(富山)は前売期間中の販売あり

#### フェスタ Ensemble SHOWCASE

各公演 全席自由 **500円** 前売・当日販売あり

#### コンクール 披露演奏会(大阪・東京)

各公演 全席指定 **1,000円** 前売・当日販売あり

チケット取り扱い先など詳細は、特設ウェブサイトをご覧ください。

# 第12回大阪国際室内楽フェスタ

## 1次ラウンド：富山会場に出場

(2026年3月24日時点)



コンチェルティノ・アコースティック・バンド(モルドバ)

ヴィタリー・ネグロツツァ (フルート)  
ユーゼン・ネグロツツァ (バンドネオン)  
マルク・オンソスキ (ピアノ)  
セブロード・イヴァンチェンコ (ギター)  
ユーギニ・ウルス (ヴァイオリン)  
マクシム・カザコフ (コントラバス)



ティアント・リード・クインテット(オランダ)

マリア・ゴンサレス・ブジョン (オーボエ/イングリッシュホルン)  
マリア・レイサ・オルモス・ロス (クラリネット)  
エリック・ステイヴェン・ロバート・アバタ (バスクラリネット)  
オヴィディ・マルティ・ガラサ (サクソフォン)  
マリア・ロサダ・ブルゴ (バサーン)



ユーフォリア・デュオ(中国)

チ・マ (アコースティック)  
ヤン・チョウ (チェロ)



レゼンズ(ドイツ)

オンデル・パログル (ヴァイオリン)  
ピアンカ・アダメック (ヴァイオリン)  
オティセアス・ラヴァリス (ヴィオラ)  
ティエゴ・ヘルナンデス・スアレス (チェロ)



ノタシルヴァー(ロシア)

マリア・ルゴフスカヤ (ドムラ)  
セルゲイ・ルゴフスコイ (バヤン)



カルテット・アンシャンテ(フランス)

ニコラ・シャトラン (クラリネット)  
サラ・ルフェーブル (クラリネット)  
ベルトラン・ロード (バセットホルン)  
エリーズ・マレ (バスクラリネット)  
ブライアン・マントル (ヒップホップダンサー)



クワチュール・アヴェーナ(フランス)

ニコラ・アラード (ソプラノサクソフォン)  
ファビオ・チェザレ (アルトサクソフォン)  
辻本 純佳 (テナーサクソフォン)  
アダム・キャンベル (バリトンサクソフォン)



ザ・ムーニン・フログズ(アメリカ)

エドワード・グッドマン (ソプラノサクソフォン)  
ゲイブリエル・ピケ (アルトサクソフォン)  
ジェフ・シグフリード (テナーサクソフォン)  
ジョザン・ホルティン・グーエ (テナーサクソフォン/ソプラノサクソフォン)  
ジェフリー・ラング (バリトンサクソフォン)  
ルーカス・ホプキンズ (バスサクソフォン)

## 1次ラウンド：三重会場に出場

(2026年3月24日時点)



シーズージー・バンド(スペイン)

エヤル・ストリート (バスーン/バロックバスーン/ドッドゥク)  
ミロ・マエストリ (ホルン)  
パブロ・ウェイン (バンドロン/ドラム/パーカッション)  
ラケル・マサダシュ (ヴィオラ)  
サシャ・アグラノーヴ (チェロ)



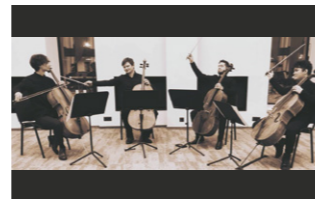
デュオ・カロリーナ&イヴォ(ポーランド)

イヴォ・イェディネツキ (クラシカルアコースティック)  
カロリーナ・ミコワイチック (ヴァイオリン)



エルヴィラ・ドンスカヤ・アンド・ラマン・シチョフ・デュオ(ロシア)

エルヴィラ・ドンスカヤ (バラライカ)  
ラマン・シチョフ (バラライカ)  
アレクセイ・キリロフ (ピアノ)



クレヴェール・カルテット(ロシア)

イゴール・ポトウヴィン (チェロ)  
マキシム・アクチュリン (チェロ)  
アンドレイ・ユフィモフスキ (チェロ)  
ラバニ・アルダンゴル (チェロ)



メディスカイ・アンサンブル(スペイン)

エイデル・ディアス・サスベ (フルート)  
ホルヘ・フエンテス・オソリオ (オーボエ)  
パオラ・バルバ・オカニャ (クラリネット)  
ギエルモ・デ・ラ・リヴァ・パレダス (バスクラリネット)  
サルバドル・ルイス・マルティネス (バサーン)  
ルシア・モヤ・ブエノ (ホルン)



ノルディック・エコー(ドイツ)

アレクサンドラ・エサコワ (フルート)  
マリア・スミルノワ (ギター)



ニコライ・ブダーシュキン記念ステイト・ロシアン・アンサンブル(ロシア)

ヴァレリイ・ティシュコフ (スモールドムラ)  
ナタリア・バク (アルトドムラ)  
ヴィクトリア・ソコロワ (プリマバラライカ)  
アンドレイ・ヘルジエフ (コントラバスバラライカ)  
ティミトリ・シェリポフ (バヤン)  
アナスタシア・シェリポフ (鍵盤ゲースリ)



ゼッド(アメリカ)

コナー・オトゥール (ソプラノサクソフォン)  
ジェイコブ・フェルドマン (アルトサクソフォン)  
マリナ・サケラキス (テナーサクソフォン)  
デイヴィッド・ベネット (バリトンサクソフォン)

フェスタ 審査日程 1次ラウンド(富山) 5/9(土) 1次ラウンド(三重) 5/9(土) セミファイナルラウンド 5/12(火) ファイナルラウンド 5/13(水)

# 第12回大阪国際室内楽コンクール

## コンクール第1部門参加団体

(2026年3月24日時点)

### 〈第1部門：弦楽四重奏〉



アレテ・カルテット(韓国)

チェアン・ジョン (ヴァイオリン)  
ウンジュン・バク (ヴァイオリン)  
ユンソン・ジャン (ヴィオラ)  
ソンヒョン・バク (チェロ)



ドーナム・カルテット(アメリカ)

スンウォン・バク (ヴァイオリン)  
インエ・チョ (ヴァイオリン)  
イルギョン・シン (ヴィオラ)  
ヒョンミン・リー (チェロ)



エリニス・カルテット(アメリカ)

エリザベス・スチュワート (ヴァイオリン)  
ヨーゼフ・レイマ (ヴァイオリン)  
マリア・ライサネン (ヴィオラ)  
ステルジオス・テオドリディス (チェロ)



カルテット風雅(日本)

落合 真子 (ヴァイオリン)  
小西 健太郎 (ヴァイオリン)  
川邊 宗一郎 (ヴィオラ)  
松谷 壮一郎 (チェロ)



アイラ・ストリング・カルテット(イギリス)

高橋 弥生 (ヴァイオリン)  
キナン・ウォーカー (ヴァイオリン)  
ソフィア・ゴメス・アルベルト (ヴィオラ)  
ダヌシカ・エティリシナ (チェロ)



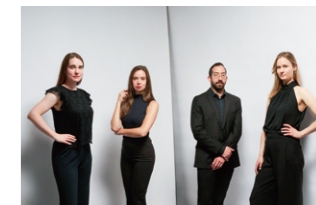
カルテット湊(オーストリア)

佐々木 大芽 (ヴァイオリン)  
三田 悠 (ヴァイオリン)  
ジリャン・シー (ヴィオラ)  
坂井 武尊 (チェロ)



モータス・カルテット(オーストリア)

ティム・デ・フリース (ヴァイオリン)  
カルラ・クリシュ (ヴァイオリン)  
エリン・カーター・ビッツ (ヴィオラ)  
ドモンコス・ハートマン (チェロ)



トゥリクム・カルテット(スイス)

イスカ・ランプレツィット (ヴァイオリン)  
カロリーナ・ミスコヴィッツ (ヴァイオリン)  
アミール・リベルソン (ヴィオラ)  
マウラ・リッケンバッハ (チェロ)

コンクール第1部門 審査日程 1次ラウンド 5/17(日) 2次ラウンド 5/19(火) 3次ラウンド 5/21(木) ファイナルラウンド 5/22(金)

## コンクール第2部門参加団体

(2026年3月24日時点)

### 〈第2部門：ピアノ三重奏/ピアノ四重奏〉



アスタエーン・トリオ(イギリス)

ペーナイヤ・ヘイミ (ピアノ)  
マヤ・ホルヴァット (ヴァイオリン)  
リヤ・ヘイミ (チェロ)



ダヴィッド・トリオ(ドイツ)

ヨナ・ソフィア・ユツツィ (ピアノ)  
ヨハネス・エヴァルド・ヴェンデル (ヴァイオリン)  
クリストフ・ベンヤミン・ランプレヒト (チェロ)



トリオE.T.A.(ドイツ)

ティル・ホフマン (ピアノ)  
エレネ・メイバリアニ (ヴァイオリン)  
ナジャ・ライヒ (チェロ)



エリック・トリオ(スイス)

パウラ・ベルスネグィ (ピアノ)  
ジャウマ・アンジェレス・フィテ (ヴァイオリン)  
イアゴ・ドミンゲス (チェロ)



トリオ・インテンディオ(チェコ)

カロリーナ・ファルケナウエル・フランシショヴァ (ピアノ)  
フィリップ・ザイコフ (ヴァイオリン)  
ヴィレム・ベトラス (チェロ)



トリオ・ティミア(カナダ)

イタマー・プラグ (ピアノ)  
ジュン・リー (ヴァイオリン)  
フランソワ・ラモンターニュ (チェロ)



オイフォリー・カルテット(ドイツ)

ダニエル・シュトライヒャー (ピアノ)  
富田 心 (ヴァイオリン)  
ユリヤ・ヴァヴロフスカ (ヴィオラ)  
クララ・イリフバー (チェロ)



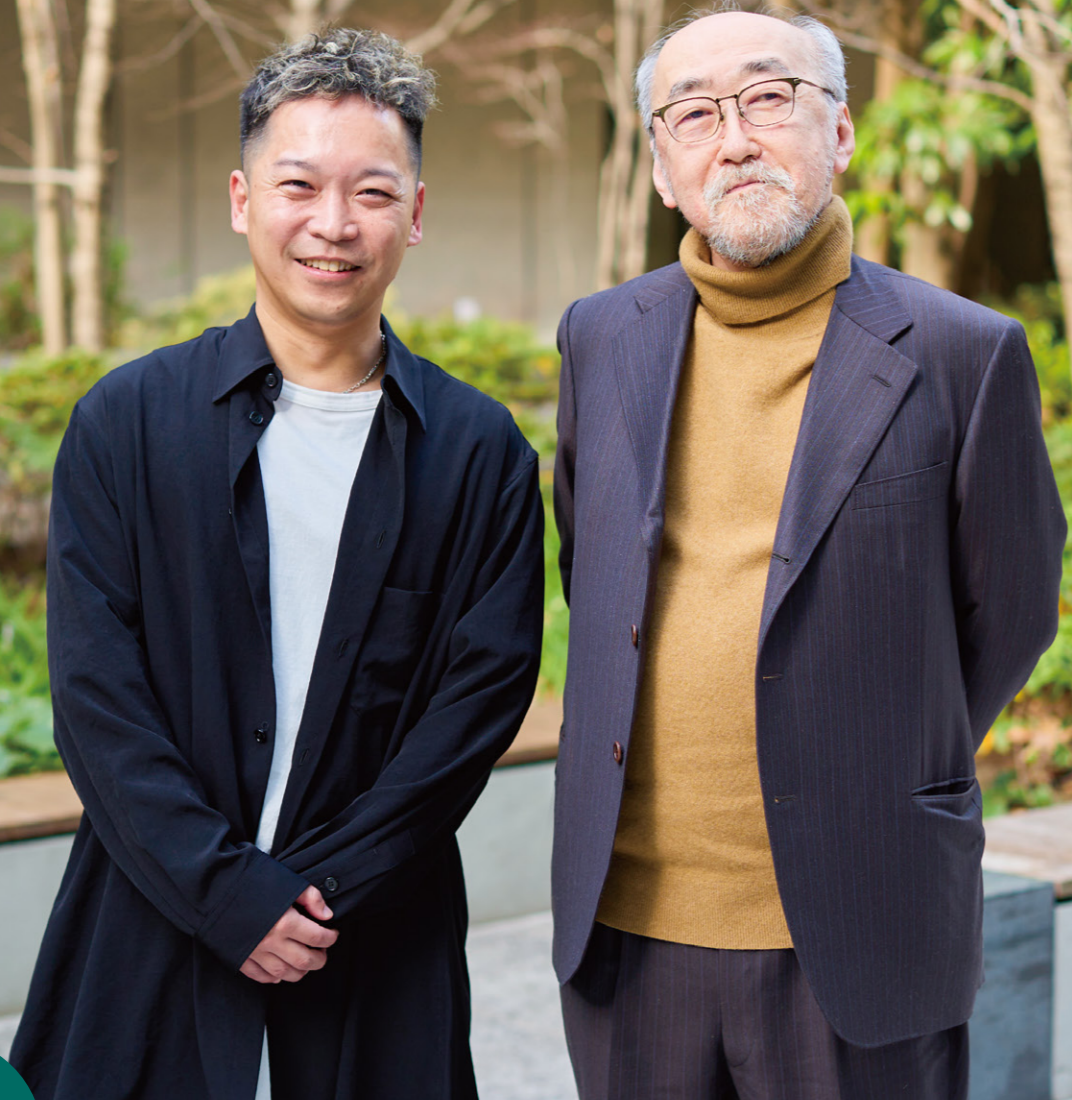
カルテット・ウェルテル(イタリア)

アントニーノ・フィウマラ (ピアノ)  
ミーシア・イアン・ニセバシヤニニ (ヴァイオリン)  
マルティーナ・サンタローネ (ヴィオラ)  
ヴラディミール・ボクダノビッチ (チェロ)

コンクール第2部門 審査日程 1次ラウンド 5/18(月) 2次ラウンド 5/20(水) ファイナルラウンド 5/22(金)

Kenji Sakai

Ichiro Nodaira



特別対談

# 二人の作曲家が語る 弦楽四重奏の深淵

**野平一郎** × **酒井健治**  
(作曲家・ピアニスト) (作曲家)

第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ開催を目前に控えた本号では、お二人の作曲家の対談をお送りする。コンクール第1部門(弦楽四重奏)3次ラウンドの課題曲「フローティング・パーティクル」を作曲された酒井健治さんと、今回コンクールの審査委員を初めて務める野平一郎さん。酒井さんの新作をめぐるお話やお二人の弦楽四重奏に対する向き合い方、そしてコンクールへの期待などについて自在に語っていただいた。

文:後藤菜穂子(音楽ライター)

酒井健治さんによる委嘱新作が課題曲となっている第1部門3次ラウンドは、5/21(木)に開催!

当日は10:10~酒井さんが登場するトークセッションを開催します。チケット情報など詳細は3-4ページをご覧ください。

## コンクール審査委員



審査委員長  
**モニカ・ヘンシェル**  
ヴィオラ/ドイツ  
ヘンシェル・クアルテット  
【第2回コンクール第1部門優勝】



**ウェイガン・リ**  
ヴァイオリン/アメリカ  
上海クアルテット



**澤 和樹**  
ヴァイオリン/日本  
澤クアルテット



**オリヴァー・ヴィレ**  
ヴァイオリン/ドイツ  
クス・クアルテット



**元淵 舞**  
ヴィオラ/アメリカ-日本  
元ポロメオ弦楽四重奏団



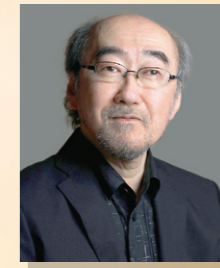
**アリステル・テイトウ**  
チェロ/イギリス  
元ベルチャ・クアルテット  
【第3回コンクール第1部門優勝】



**サンウォン・ヤン**  
チェロ/韓国  
トリオ・オウオン



**相沢吏江子**  
ピアノ/アメリカ-日本  
ホルショフスキ・トリオ



**野平一郎**  
ピアノ/日本  
東京音楽大学学長

## フェスタ特別審査員



**呉 信一**  
トロンボーン  
京都市立芸術大学名誉教授



**河野 正孝**  
オーボエ  
関西室内楽協会代表



**山本 祐ノ介**  
チェロ、常任指揮者  
東京ニューフィルハーモニック管弦楽団



**片岡 リサ**  
箏曲家  
大阪音楽大学特任教授

**藤門 浩之**  
日本室内楽振興財団常務理事

**河井 拓**  
大阪国際室内楽コンクール&  
フェスタプロデューサー

フェスタ特別アドバイザー

**福岡 正太**  
国立民族学博物館 副館長

上記6名に加え、事前に公募した一般審査員の投票によって審査します。(一般審査員募集は終了しています)

予告

毎年秋のグランプリ・コンサートで優勝団体が全国を回ります!

コンクール各部門の第1位・フェスタのメニューイン金賞受賞団体は、受賞の副賞として、2026年から2028年にかけて毎年秋に日本国内約10都市をめぐるコンサートツアーに参加します。各部門の覇者たちが行うこのツアー、どの団体があなたの街を訪れるか、どうぞ楽しみにお待ちください!

コンクール第1部門  
2026年11月

コンクール第2部門  
2027年秋

フェスタ  
2028年秋



詳細は決定しだい、日本室内楽振興財団のウェブサイトやSNSでお知らせします。



**野平一郎** (作曲家・ピアニスト)  
Ichiro Nodaira [Composer/Pianist]  
東京藝術大学大学院修了後、パリ国立高等音楽院に学ぶ。作曲家、ピアニスト、指揮者、教育者として国際的に活躍する音楽家。ピアニストとしては内外のオーケストラにソリストとして出演する一方、多くの国際的な手たちと共演し、室内楽奏者としても活躍。コンチェルトの弾き振りや、自作自演を含めた指揮活動も多い。第13回中島健蔵音楽賞、第44回、第61回尾高賞、第35回サントリー音楽賞、第55回芸術選奨文部科学大臣賞、日本芸術院賞、第52回ENEOS音楽賞洋楽部門本賞等を受賞。紫綬褒章を受章。日本芸術院会員。モナコ・ビエール皇太子財団音楽評議員。日本フォーレ協会会長。東京文化会館音楽監督。東京藝術大学名誉教授、東京音楽大学学長。

**コンクール課題曲  
「フローティング・パティクル」の着想**

**酒井**：今回、第12回大阪国際室内楽コンクール弦楽四重奏部門の課題曲を書かせていただきましたが、実は、僕は弦楽四重奏曲のデビューが遅くて、それ以前はむしろ管楽器のアンサンブルのための作品を書くことが多かったんです。3年ほど前にびわ湖ホール地域プロジェクトのために初めて作曲し、今回が2作目になります。その点、ヨーロッパの作曲家たちは割と若い頃から手がけていますね。たとえばアルティッティ弦楽四重奏団やディオティマ弦楽四重奏団といった現代音楽を専門とする楽団がマスタークラスを開いて、若い作曲家の曲を試演する機会があるなど、けっこう恵まれているように思います。

**野平**：…そうすると、酒井さんは弦楽四重奏は好きですか？

**酒井**：これがなかなか難しくてですね(笑)。

僕は大学時代に副科でヴァイオリンを3年間やっただけですが、なかなか上達しなくて。音程とかボウイングとか本当に難しい楽器だと感じていて、たぶんそのときの苦手意識をひきずってきたのだと思います。弦楽器はちょっと角度を変えただけで音が変わってしまう、音がすごく流動的だと思ったんですね。そういったインスピレーションから、弦楽四重奏曲第1番には「フローティング・フェイス」、そして今回の曲には「フローティング・パティクル」というタイトルをつけました。

第1番と第2番は、同じ軸上で対比させたかったというのがあって、それぞれどちらにもフローティングと付けているんですけど、第1番は一つ一つの事柄ではなくてそれを総体として見たときの移行していく音楽として書いたのに対して、第2番は本当に細かい一つ一つの点が移行していく様相をとらえたんです。その意味で、アプローチは表裏一体みたいな感じかもしれません。

今は変わっている面もありますが、ひと昔前のフランスですと、やはり個人技をすごく大事にしている、オーケストラだとあまりうまくいかなければアンサンブルだととても魅力的な演奏をするという歴史みたいなのがあって、そうしたことが垣間見える瞬間がフランス滞在中にありました。とくに現代音楽に精鋭化したアンサンブルアンテルコンタンポランやアンサンブルリディネール、すべれた若い現代音楽のグループもたくさんありますし、やはりアンサンブル文化が昔から強いと思いますね。

**コンクール課題曲を作曲する  
ということ**

**野平**：酒井さんのコンクールのための作品といいますが、2012年のエリザベート王妃国際音楽コンクールの本選の課題曲となったヴァイオリン協奏曲がありますが、課題曲を作曲されるときにコンクールというのは意識の端に上りますか？



**酒井健治** (作曲家)  
Kenji Sakai [Composer]  
大阪生まれ。京都市立芸術大学、パリ国立高等音楽院、ジュネーヴ音楽院を卒業。Ircamにて電子音楽を学び、2012年マドリッド・フランスアカデミー芸術部門の会員に選出。ジョルジュ・エネスコ国際コンクール、エリザベート王妃国際音楽コンクール両作曲部門でのグランプリをはじめ、武満徹作曲賞第1位、芥川作曲賞等国内外の著名な作曲賞を受賞。作品はアンサンブル・アンテルコンタンポランやレ・ヴァン・フランセ、成田達輝、萩原麻未等の著名な団体・ソリストによって初演されており、2025年には、ソニックシティ オペラ「平家物語～平清盛～」が世界初演された。また国内外で室内楽作品の個展も開催している。京都市立芸術大学教授。

**酒井**：もちろん意識して書いています。例えばすごくコンセプトチュアルな作品を書いて、それが演奏されるとき、そのコンセプトにもっとも近いものが良い演奏だと思われるかもしれないんですが、今回の作品はコンセプトチュアルというよりも、多様な解釈を生み出すような楽譜を書くことというのが重要なポイントで、それはエリザベートのときもそういうふう考えたんですよね。すなわちいろいろな解釈を引き出すことがコンクールでは一番重要だということなんです。

国際コンクールですと、やはり演奏における柄が出るわけです。たとえばエリザベートでは、ロシア・スクールの影響が見られるような演奏とか、成田達輝さんのようなスマートで武満徹を彷彿させるような音楽の作り方とか、韓国人のヴァイオリニストですと音のキレがすごいことが、それぞれ異なる12人の演奏でしたので、今回もそういったものが浮き出るようなものになってほしいなと思います。こういうなければならぬ

**カルテットというジャンルと  
フランスの潮流**

**野平**：僕は酒井さんと正反対で、学生の頃からカルテットも弦楽器もけっこう好きでしたね。最初にカルテットを書いたのは大学生のときで、その後も何作か書いていたら第6番まできました。第6番は私が芸術監督をつとめてきた静岡音楽館AOIのAOIレジデンス・カルテットのために書いた作品です。それぞれ別の時期に書いたものですが、作風は全く違って、第1番から第6番への連続性はあまりないんですけどね。カルテットだったらもう何曲かアイディアがあるかなと思っています。

僕は、楽器によって一人の作曲家が持てるアイディアには範囲があるような気がするんですけど、酒井さんはいかがですか？

**酒井**：そうですね。私自身は管楽器、特にサクソフォンの曲はそれだけでリサイクルができるくらいたくさん書いてるんですけど、弦楽四重奏にはなんか距離感を感じていまして、今回の第2番の最後の方でやっと仲良くなれたかなという感じなんです。

**野平**：僕はカルテットについてのはちょっと珍しい編成かなって思っているんです。歴史的に室内楽には様々な編成がありましたけど、これほど生き残っているジャンルってないのでは？つまり、ハイトンの時代からロマン派を経て、現代の作曲家までみんな興味があるわけですね。たしかにひとり十数曲書く人はいないかもしれませんが、でも少なくともみんな1、2曲はトライして、それなりに

いつよりも、その過程でどれだけすばらしい音楽をこの楽譜から引き出せるか。もし私が審査員であるならば、そういうふう判断したいなと思います。

**野平**：僕自身も浜松国際ピアノコンクールや東京国際ヴァイオリンコンクールのために課題曲を書いたことがありますが、今はおしなべて奏者の技術的な許容量が昔に比べて高くなっているんで、難しいものを書くことが、現代作品に特有な技法を習得させることが、そういう形で課題曲を書いていくということとはもつ成り立たないのではないかなって思っていました。ですので酒井さんの姿勢にとても共感しますし、多様な解釈を生み出す楽譜というのにはいへん魅力を感じています。その方が面白いと思うんですよね。

**酒井**：ありがとうございます。それが実際に形になるといいですね。

**音楽教育における室内楽の役割と  
コンクールへの期待**

今、僕は京都市立芸術大学で教えていますが、ぜひ学生たちには今回の室内楽コンクールを聴きにいらしてほしいと思っています。自分たちとほぼ同年代のトップクラスの演奏を会場で実際に聴くことで、アンサンブルがどういかに作られているのかとか、どういった掛け合いがおこなわれているのかを垣間見ることが出来るはずなんですよね。そういったことを若い学生に感じてほしいなと、それぞれが課題として捉えてほしいなと教育者としての僕は願っています。

のカルテットができていて、ということはとても稀有なことのように僕は思っています。

フランスのある年代までの作曲家はカルテットをある意味神聖視していて、手を出しかねたというのはあると思うんですけど、たとえば生涯の最後にならぬと書かなかったフランクとかフォーレとか。その原因としては、ベートーヴェンの後期のカルテットを超えるものはないし、たとえ書いてもそれを乗り越えられないという空気があったと思うんです。それに反発したのがドビュッシーとラウエルだったわけですが。

酒井さんはフランスに住んでいらしたわけですが、元からフランスではエヴィアン、ポルドーでカルテットのコンクールを開催するなど、室内楽の若い人の発掘に力を入れてきましたよね。新しいカルテットの潮流をお感じになったことはありますか？

**酒井**：カルテットにとどまらず、フランスの演奏という面で見たとときの醍醐味は室内楽とかアンサンブルにあると思うんですね。



**野平**：僕も大学で学生たちに室内楽をやりたいって、つねに言っています。室内楽はとても重要ですし、それがないとやっぱりヨーロッパ音楽の要のところが抜けてしまうと僕は思っています。室内楽というのは自分が弾ければ成せるというものではなく、人と一緒に弾かなければならない。しかも人と一緒に弾くだけではなくて、それで一つひとつのまとまりを作らなければならぬわけです。それにはすごく高い音楽的な能力がいるんですよ。しかも、室内楽では人と協調するだけじゃなくて、人に対して自分がどう反応しなければならぬかも学びます。だから音楽的にはいちばんの勉強だと僕は思っていますし、社会の縮図そのものだっていってもよいかもしれません。

私自身も静岡で室内楽のコンサートを開いて、室内楽の土壌を作ってきたのですが、その意味で大阪国際室内楽コンクールが果たしている役割というのはものすごく大きいと思いますし、ぜひ続けていただきたいと願っています。こうしたすばらしいコンクールを開いてやっていると、これは、東京の人は嫉妬してもいいんじゃないでしょうか。



Q

大阪国際室内楽コンクールは、世界的に見てもどのような格付けにあるのでしょうか？他の世界各国の代表的な室内楽コンクールについても教えてください。

A

コンクール大流行の昨今でも、室内楽専門の国際大会はそれほど数はありません。興味深いことに、国際音楽コンクール世界連盟が課す細かい規定に適ったメジャーな国際弦楽四重奏コンクールは、本場欧州では各国にひとつ、あとはアフリカを除く各大陸にひとつずつ、というのが現状です。

列挙すれば、大阪フェスタの実質上の創設者でもあるヴァイオリニストのユディ・メニューイン卿が始めたイギリスのウィグモアホール国際弦楽四重奏コンクール(旧ロンドン国際)、フランスのボルドー国際弦楽四重奏コンクール(旧エヴィアン国際)、イタリアQの名第1ヴァイオリニストを顕彰するイタリアのパオロ・ボルチアーニ弦楽四重奏国際コンクール、ドイツは放送局連合が開催するミュンヘンARD国際音楽コンクールの弦楽四重奏及びピアノ三重奏部門、米大陸はカナダのバンフ国際弦楽四重奏コンクール、豪州は大阪同様に弦楽四重奏とピアノ三重奏両部門があるメルボルン国際室内楽コンクール、アジアの大阪国際室内楽コンクール。賞金規模や過去の実績からこれらが「世界7大大会」と呼ばれ、それぞれが3年から4年に一度の開催。結果として、毎年世界のどこかでひとつかふたつのメジャー大会が開催されています。

ちなみに2026年の弦楽四重奏大会は大阪とミュンヘン、ピアノ三重奏&四重奏は大阪のみです。

Q

演奏団体はコンクールに向けてどんな努力をしているのですか？普段はオーケストラ活動もしている？室内楽コンクール出場は時間的・精神的に大変なことなのでしょうか。

A

現在のメジャーな室内楽コンクールでは「楽器が上手な若者が集まり、課題曲を練習し超名演を披露、大コンクールで優勝する」というドラマのようなことは、まず起きません。

メジャーな室内楽コンクールに招聘されるグループは、同じ顔ぶれが数年に渡り年間300日以上集まり、限られた楽譜をひたすら練習し続けた、極めて特殊な経歴の音楽家たちです。2,3年の研鑽で国内大会、国際大会参加が見えてくるのは4,5年目くらいから、が常識でしょうか。世界の主要オーケストラが「オーケストラ・アカデミー」などの名称で設置する若手奏者向け期間限定の実践指導との掛け持ちはあっても、多忙なプロの楽団に正規雇用されつつ室内楽練習に明け暮れるなど、物理的に不可能です。

往々にして、学校で出会った同世代が室内楽での単位獲得を目的に始める室内楽漬け生活ですが、家族や恋人よりも長い時間を一緒に過ごし、音楽性が固まっていく重要な時期を共有するのです。始まりは仲良し集団でも、それで済むはずはありません。室内楽を学ぶことで変わっていく自分を楽しめる人ばかりでもないでしょう。大阪の舞台にまで到達しているのは、そんな精神的な重圧に耐えたタフな若者たちなのです。

Q

室内楽コンクールを経て、演奏団体はどんな未来を目指していくことになるのでしょうか？

A

個々人の奏者としての能力や才能を見極める独奏コンクールとはまるで違い、室内楽コンクールは音楽家のキャリアの指標となるために存在する教育機関です。

まずは開催文化圏からの参加が前提の国内の室内楽コンクールで力試し。日本では、宗次ホール弦楽四重奏コンクールと秋吉台音楽コンクール室内楽部門のふたつがその役割を果たしています。次に、世界のどの文化圏からの参加も可能なサポートが前提の大規模国際大会へと駒を進めます。なお、「学生時代を終え一度は社会人になった音楽家がグループを結成する」というケースも配慮し、殆どの国際大会は参加可能年齢を独奏コンクールより遙かに高く設定、平均30代半ばまでとしています。

それぞれのレベルで、室内楽コンクールの結果はキャリアの大きなターニングポイントとなります。室内楽グループとすれば、コンクールの良い結果ははじめの一步。メジャーな国際大会で結果を出して数年で年間に50から80回のコンサートを作れば、室内楽に専念するベンチャー・ビジネスとしてやっとな成功への軌道に乗ったと言えるでしょう。尤も、そのレベルにまで至れるのは、5年から10年に数団体あるかないかの超狭き門ですけど。

室内楽コンクールをきっかけに世に出た著名ソリストは、恐らく



過去にひとりもおりません。ですが、オーケストラのコンサートマスターや首席奏者に目を向ければ、室内楽コンクール経験者はたくさん。現実的なことを言えば、室内楽コンクールは現存する最高のオーケストラ首席奏者育成機関なのです。

例えば、2008年大阪国際コンクール第2部門で優勝したダリ・ピアニ・トリオのヴァイオリニストヴィネタ・サレイカは、後にアルテミスQの第1ヴァイオリンに抜擢され、更にベルリンフィル初の女性コンサートマスターへと転身していきました(今年のミュンヘンARD大会弦楽四重奏部門審査委員長を務めています)。日本でも、民音室内楽コンクール(東京国際音楽コンクール)で優勝したハレーQやイグレックQから豊嶋泰嗣や矢部達哉、ミュンヘンARD弦楽四重奏部門入賞のウェールズQからは水谷晃という名コンサートマスターを生んでいます。首席ヴァイオリンやチェロも枚挙に暇がありません。間接的ではありますが、アンサンブルを整える技術や音楽性を高いレベルで評価する場として、室内楽コンクールには音楽界に大きな貢献をしているのです。

メジャーな室内楽コンクールとは一種のオーディション。プロとして室内楽団を続けていく潜在能力や可能性を先輩達が見極め、自分の判断で次の道を選んでいくための場所なのです。



渡辺和(音楽ジャーナリスト)

国際基督教大学博士課程前期修了。室内楽や現代音楽を中心にフリージャーナリストとして活動。演奏家インタビュー、コンクールレポートなど「音楽の友」等に寄稿。著書に「カルテットの名曲名演奏」(音楽之友社)、「ホールに音楽が刻まれるとき」(ぎょうせい)、共著に「黒沼俊夫と日本の弦楽四重奏団」(柏の森書房)他。

大阪国際室内楽コンクールをもっと楽しむ!

# 続 そこがききたい! 室内楽コンクールのナゾ

渡辺和(音楽ジャーナリスト)

3年に一度の室内楽の一大イベントが、まもなくやってくる! 大阪国際室内楽コンクールって、どうやら世界的な音楽団体が集まるすごいコンクールらしい。だけど室内楽ってちょっと敷居が高くて、どうやって楽しんだらいいのかよくわからない……。そんな方を対象に、初心者の方でもコンクールを楽しめる鑑賞のヒントをお届けします! 世界の室内楽コンクール取材し、コンクール専門委員も務める音楽ジャーナリスト・渡辺和さんに、素朴な疑問をぶつけました。

Q

コンクールの演奏を聴衆としてより楽しんで聴くには、事前にどんな予習をしたらよいと思いますか？

A

クラシック音楽では、演奏される音楽の全てが「リポート」です。新しい作品であれ、ある意味、どれも「リメイク」。勿論、何も知らずに接してOKな傑作名演もありますが、芸術の性格上、より深く楽しむには旧作旧演を知る方がいいのは言うまでもないでしょう。

じゃあ少しは予習をしておこう……とポケットからスマホを取り出した貴方、音楽を検索する際に、演奏者で探しますか、それとも曲で探しますか？

アーティストで探すというなら、大阪にやってくる16団体の名前をまず入れてください。煩雑かもしれませんがちょっと我慢して、欧文表記での検索がオススメ。いくつもの映像がアップされるでしょう。Z世代らしく楽しそうに練習するノリの良い姿や旅の様子など、人柄が見えるクリップも。

いちばんの予習は、グループが参加したコンクールでの演奏を収録したライブです。昨今の大会は、演奏をストリーミングでネットに流し、無料で見直し可能なアーカイブに保存しています。これから演奏する団体の数ヶ月前を確認し、どんな若者達で、どんな立ち居振る舞いかわかるだけで、親近感がグッと増すはず。「推し」が見つかるかもしれませんね。

曲で探す派なら、住友生命いずみホールで鳴る作品の予習あるのみ……と言いたところですが、なんとラインナップは総計60以上! これさえ押さえれば大丈夫、という重要作をピックアップしておきましょう。曲の流れを知るだけで、5月を待つ気持ちは違はず。



弦楽四重奏	ハイドン：弦楽四重奏曲 作品74-1 ハイドン：弦楽四重奏曲 作品76-4 ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第6番 作品18-6 ウェーベルン：弦楽四重奏のための5つの楽章 作品5 シューベルト：弦楽四重奏曲第14番 D810<死と乙女> メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲第2番 作品13 ドビュッシー：弦楽四重奏曲 作品10 バルトーク：弦楽四重奏曲第4番 Sz.91
ピアノ三重奏	ハイドン：ピアノ三重奏曲 Hob. XV-27 メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲第1番 作品49 ワインベルク：ピアノ三重奏曲 作品24 武満徹：「ピトウィーン・タイズ」
ピアノ四重奏	モーツァルト：ピアノ四重奏曲第2番 K. 493 シューマン：ピアノ四重奏曲 作品47 ブラームス：ピアノ四重奏曲第1番 作品25

あまり馴染みがないピアノ四重奏は、定番名曲でピアノ三重奏との違い、とりわけヴィオラの響きに注目。ピアノ三重奏は、ピアノの音量バランス。名も知らぬワインベルクのピアノ三重奏でも、意外にノリノリではまってしまうかも。現代曲はオンラインでは拾い切れない要素も多く、ただ難解に感じがち。いっそ予習なしでライブのインパクトに接するのもありかも。

まだ余裕があるぞ、という方は、本選に並ぶベートーヴェンやシューベルトの超大作に挑戦。ベートーヴェン弦楽四重奏曲第12番 作品127、シューベルトピアノ三重奏曲第2番 D929を聴いて本選に臨んでください。

前回2023年のコンクールの際に「奏」で掲載し、大きな反響があった記事もぜひウェブでお読みください [こんなQへの回答が載っています](#)

Q. 拍手をしたり、スタンディングオベーションをしてもいいのでしょうか？

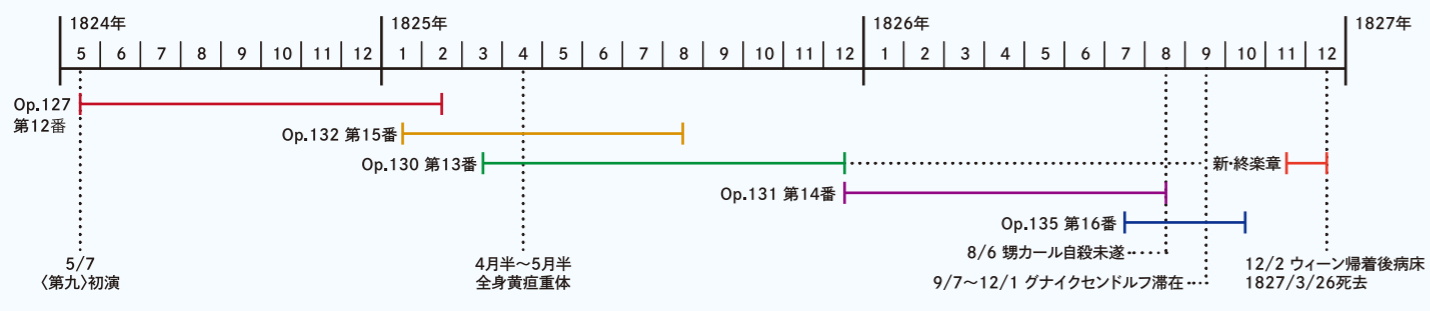
Q. コンクールは参加団体全部を聴かないといけないのでしょうか？

Q. ベルリンで勉強している私の友人の弦楽四重奏団は、第1ヴァイオリンが韓国系カナダ人で、第2ヴァイオリンがフランス人で、ヴァイオリンが日本人で、チェロがモナコ国籍のロシア人です。大阪に参加すると、どこの国の代表とされるのでしょうか？

Q. コンクール部門を一日だけ聴くなら、どの日がオススメですか？

[https://jcmf.or.jp/magazine\\_desc/competitionfaq/](https://jcmf.or.jp/magazine_desc/competitionfaq/)





### 弦楽四重奏曲 第12番 変ホ長調 Op.127

ロシアのガリツィン侯爵から依頼された3曲セットの第1作を《第九》初演の直後から作曲。見かけ上は古典的な4楽章構成で第2楽章では下屬調を設定しているが、音楽内容は孤高様式特有の斬新な表現に満ちている。

**第1楽章 Maestoso 変ホ長調 4分の2拍子～Allegro 4分の3拍子。**  
マエストーソの2拍子導入楽句6小節のあとにアレグロの3拍子の楽段が続く。このパターンを繰り返しながら発展。パターンの転換点でト短調、ト長調、ハ長調と転調してゆく。

**第2楽章 Adagio ma non troppo e molto cantabile 変イ長調 8分の12拍子。**

チェロから順に高方に湧き上がる静かな序奏後に第1ヴァイオリンに優美な主題が提示される(第20小節まで)。孤高様式を象徴する6つの変奏。第2変奏アンダンテ・コン・モートでは4分の4拍子、アダージョ・モルト・エスプレッシーヴォ、2分の2拍子の第3変奏では、驚くべきことに変イ長調(♭4つの調)から増5度上のホ長調(♯4つの調)となる。第4変奏以降も転調を繰り返すが、拍子は8分の12拍子。

**第3楽章 Scherzo Vivace 変ホ長調 4分の3拍子。**

全435小節という前代未聞のスケルツォ。短い導入の後スケルツォ主部がフーガ風に始まり、この主部自体がソナタ形式的構造を持ち、トリオ部が舞曲風な主題を扱い、主部再現後のコーダでもトリオの一部を扱うなど、構成では《第九》のスケルツォと似た特徴をもっている。頻繁にテンポが変わる。

**第4楽章 Allegro 変ホ長調 2分の2拍子～Allegro comodo 8分の6拍子。**

冒頭主題音形の中にはBACHバッハの逆行HCAB(ヒシ・ド・ラ・シ)音形が仕込まれている。ソナタ形式による展開の後、ヴァイオリン2声部による長いトリルで始まるコーダは楽章の主部では全く聴かれなかった新しい音楽で、付加楽章的でもある。

### 弦楽四重奏曲 第15番 イ短調 Op.132

ガリツィン公のための第2作を作曲していた1825年4月半ばごろ病に倒れ、18日には主治医A.ブラウンホーファー博士(1780～1845)の往診を頼むほど全身黄痘症状の重篤な事態となった。2楽章までほぼ書き上げていた四重奏曲の作曲は中断された。しかし、奇跡的に快方に向かい、5月初めには散歩に出られるまでに回復し、いつもの年より早めに温泉地バーデンに移り、作曲を再開した。イ短調四重奏曲の終楽章コーダでは同主長調のイ長調に到達し、ここで先行する各楽章の主題を変形回想して全曲の有機的統一を図っている。

**第1楽章 Assai sostenuto イ短調 2分の2拍子～Allegro 4分の4拍子。**  
冒頭8小節の序奏は短2度上行するチェロの2音に始まり、これを跳躍させて反行形の短2度進行に接続する部分では順次ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、第1ヴァイオリンが加わり静謐で神秘的な響きを作る。半音動機は楽章を超えてこの作品全体の性格に影響を与える重要な素材となる。第9小節でヴァイオリンが高みから駆け降りるような走句を奏し、これに導かれてチェロに主題が提示される。これをヴァイオリンが引き継ぎ発展させる。

**第2楽章 Allegro ma non tanto イ長調 4分の3拍子。**

大規模なスケルツォであるが、いつもの諧謔性ではなく、順次進行を中心とした旋律素材を発展させたドイツ舞曲風の主部と、終始流れるような8分音符声部と4分音符による刻みが同時進行するトリオ部からなる。トリオ後半に、瞬時ではあるが、第1楽章冒頭の半音動機楽句の変形が2分の2拍子で4小節だけ復帰し、すぐに4分の3拍子に戻って、ダ・カーボする。

**第3楽章「病癒えし者の神への聖なる感謝の歌・リディア調で」Adagio リディア調 4分の4拍子～「新しい力(生命力)を感じながら」Andante 二長調 8分の3拍子。**

教会法による宗教的なコラール楽段をAとし、二長調の嬉々とした楽段をBとすれば、A1B1A2B2A3の5部分構成で各部分の再現はそれぞれ変奏される二重変奏曲となっている。最後はコラールの開始動機を用いたコラール・フーガ変奏になっている。

**第4楽章 Alla marcia, assai vivace イ長調 4分の4拍子～piu allegro～Presto イ短調 2分の2拍子。**

第1楽章の音形素材との関連を思わせるリズムカルな行進曲で進み、第24小節で完全終止するが、テンポを速めて後続の全22小節のレチタティーヴォ楽句にアタッカされ、さらに終楽章にアタッカされる。

**第5楽章 Allegro appassionato イ短調 4分の3拍子～イ長調。**

ロンド・フィナーレは跳躍音形と半音進行、そして音階的順次進行を織り交ぜた主題で始まる。この主題に先行楽章の素材の特質が織り込まれているが、第280小節以降の125小節に及ぶプレストのコーダはフィナーレ用だけでなく全楽章に対するコーダとも言える。

## 弦楽四重奏曲の金字塔

# ベートーヴェン 後期弦楽四重奏曲の 聴きどころ

平野 昭(音楽学)

### はじめに：弦楽四重奏曲、それは究極を求めるベートーヴェンの旅路の軌跡

ハイドンやモーツァルトに代表される18世紀古典派が生み出した偉大な音楽遺産である交響曲やピアノ・ソナタがそうであるように、弦楽四重奏曲もベートーヴェンによって大きな変革をとげることになる。ベートーヴェンは生涯に16曲の弦楽四重奏曲を残している。創作期はほぼ前期6曲、中期5曲、そして後期5曲の3期に区分するのが一般的であるが、様式的には中期の5曲を前半3曲《ラズモフスキー・セット》Op.59と後半2曲《ハーブ》Op.74及び《セリオン》Op.95に分けて、全体を4期区分するのが望ましい。

ベートーヴェンは交響曲第8番Op.93を1812年に書き上げてから交響曲第9番Op.125の完成までに12年間の空白を置いているのに似て、弦楽四重奏曲第11番《セリオン》を1810年に作曲(1814年に最終改訂)してから弦楽四重奏曲第12番Op.127に着手するまで長い空白期を置いている。12年ぶりの《第九》交響曲が独唱と合唱を取り入れるという交響曲史上前代未聞の革新を打ち出しているように、ベートーヴェンは晩年になっても新しい音楽表現を探索する精神にはすこしの衰えも見せていない。後期弦楽四重奏曲5曲にその革新をはっきりと認めることができる。

【ベートーヴェンの弦楽四重奏曲の創作期：3期区分と4期区分】

創作期	創作年代	作品	曲数
前期	I期 1798年夏～1800年夏	Op.18(1～6)	6
中期前半	II期 1806年4月～11月	Op.59(1～3)	3
中期後半	III期 1809年夏～1810年秋	Op.74, Op.95	2
後期	IV期 1824年5月～1826年11月	Op.127, 130, 131, 132, 135	5

### 孤高様式の究極

1822年春に最後のピアノ・ソナタ第32番Op.111を書き上げ、1823年に《ミサ・ソレムニス》Op.123を仕上げた後から一気呵成に筆を進めて1824年2月に《第九》交響曲Op.125を完成させ、同年5月7日にケルトナートーア劇場での初演と同月23日の宮廷大舞踏会場(レドゥーテンザール)での再演を済ませた後に、すでに作曲委嘱料の前払い分を受領して久しかったロシアの音楽愛好貴族で自らもチェロを嗜むニコライ・ヴォリソヴィチ・ガリツィン(ゴリツィン)侯爵のための3曲の弦楽四重奏曲の作曲に着手したのである。

ベートーヴェン研究では、1818年に書き上げられたピアノ・ソナタ第29番《ハンマークラヴィーア》Op.106以降を極めて個人的かつ革新的で緻密な表現スタイルを示しているという共通した特性から孤高期と呼んでいる。そし

### 孤高期5曲の作曲順と完成経緯

**弦楽四重奏曲 第12番 変ホ長調 Op.127:** 1824年5月下旬～1825年2月完成。  
**弦楽四重奏曲 第15番 イ短調 Op.132:** 1825年1月～同年8月完成。  
**弦楽四重奏曲 第13番 変ホ長調 Op.130:** 1825年3月～同年12月完成。  
Op.130の第13番は1825年12月に完成しているが、初演(試演)の時にその終楽章(第6楽章)の音楽が極めて難解なうえ、演奏技巧も至難という演奏者や周囲の友人、出版社らの意見を受け入れ、新たな終楽章を作曲して、それと差し替えてからガリツィン侯爵に献呈することになった。その新しい終楽章は1826年11月に滞在中のグナイクセンドルフの実弟ヨハンの邸宅で作曲

て、この孤高期様式に共通した特徴としてソナタ(多楽章作品)全体の有機的統一を追究する姿勢、そして、いずれかの楽章をフーガあるいは変奏曲で書き、また、ソナタ形式の展開において変奏技法やフーガ書法が見られることである。もうひとつ重要なことは、孤高期5曲の弦楽四重奏曲のうち、最初の4曲で楽章規模の拡大拡張が追求されていることである。一般的に使われている曲番(1863年の旧ベートーヴェン全集編纂時にOp.番号の若い順につけられたもので、作曲成立順ではない)からは見えにくいですが、ベートーヴェンは第12番のOp.127を伝統的な4楽章構成で作曲し、次の作品から5楽章、6楽章、そして7楽章(7部分=ベートーヴェン自身によって自筆譜にNr.1～Nr.7と明記)へと拡張するという革新を試みている。

されるが、これが実質上のベートーヴェンの絶筆となる。新しい第6楽章に差し替えられた「変ホ長調」四重奏曲がベートーヴェン没後直後の1827年5月にアルタリア社からOp.130として初版出版され、同時にオリジナルの終楽章も独立した《大フーガ》Op.133として同社から出版された。以上3曲、第12番(4楽章)、第15番(5楽章)、第13番(6楽章)が《ガリツィン四重奏曲》セットと呼ばれている。

**弦楽四重奏曲 第14番 嬰ハ短調 Op.131:** 1825年12月～1826年8月完成。  
**弦楽四重奏曲 第16番 へ長調 Op.135:** 1826年7月～10月完成。





マルメンQにパーカッションを加えたコンサートでは、客席は舞台を囲むように配席

プロデューサーが往く！  
世界の室内楽の現在

## 弦楽四重奏の最先端が アムステルダムで展開

河井拓 (大阪国際室内楽コンクール&フェスタプロデューサー)

オランダの首都アムステルダムは街中に運河が張り巡らされ、水運そのものが観光資源として賑わう。1月の寒風が吹く中でも、運河によって開放的な空の下では、住民も観光客もカフェのテラスでコーヒーや街発祥のハイネケンビールを酌る。

世界有数の国立美術館やオランダが誇る画家の一大コレクションを有するゴッホ美術館の他、市内には大小多数の美術館が軒を連ねる芸術の気品溢れる街であり、音楽好きにとっては「世界三大オーケストラ」とも云われるロイヤル・コンセルト・ヘボウ管弦楽団の本拠地として名が通っているだろう。

1888年に開館したコンセルト・ヘボウ (Concertgebouw) が幾重もの半環状運河の外側に位置した荘厳な建築であるのに対して、運河の中心部のアイ湾には2005年にモダンな音楽堂 (Muziekgebouw) が建設され、クラシックに限らない各種パフォーマンスが上演されている。

この音楽堂では2018年から2年毎に「アムステルダム弦楽四重奏ヒエンナレ」が開催され、世界中から弦楽四重奏団を主としたアーティストが集まってくる。その賑わいぶりは世界でも他に類を見ず、1週間余りの開催期間中は朝から晩まで何かしらのイベントが(時には同時並行で)行われており、僅か8年で欧州の室内楽ファンが訪れるフェスティバルに成長した。今年の第5回



ベルチャQとエバーヌQという世界屈指の団体による共演は、満員の客席を沸かせた

今年もこれまで以上に状況を呈している、8日間で24の弦楽四重奏団、18人の音楽家やアーティスト、16人の作曲家が会しており、39回のコンサートの他、マスタークラスやレクチャーなどが目白押し。朝は9時30分から「スーパーロマンティックな夜明け」公演で始まり、夜は22時30分開演の「晩年のベートーヴェン」まで、多い日には1日に6公演が開催され、暦年の室内楽ファンは当然のように深夜まで複数公演を聴き続ける。(筆者も初日にホールを出たのは24時を回った頃だった。)

ヒエンナレではその功績を讃えられ、創設者でアーティスト、ディレクターのヤスミン・ヒルバーディンクがアムステルダム市から表彰も受けた。実はこのヒエンナレは大阪国際室内楽コンクールとも提携協力関係にあり、前回優勝のクアルテット・インダコが、コンクールの特別賞として2024年に出演機会を提供された。



アムステルダム市から表彰を受けるヤスミン・ヒルバーディンク



アニマートQとタンプールは幽玄な世界を醸し出す

出演団体も室内楽界を第一線でリードするベルチャQ(第3回大阪コンクール優勝)、エバーヌQ、カザルスQから、アメリカのトップランナーであるアタッカQ(同第7回優勝)、若手有望の筆頭株のレオンコロQまでファン垂涎のラインナップで、1公演だけ聴いて帰るのは勿体ない顔、ふれである。

(余談だが、アムステルダムのクラシックコンサートでは、開場中や休憩中に無料でお茶やジュースの他、ビールやワインも無料で振舞われる習慣があり、ドリンク片手に語りつ姿は待ち時間を苦にしている。) また、このヒエンナレの大きな特徴は、既存の作品だけでなく数多くの新しい作品が生み出される事である。今年も世界初演とオランダ初演を合わせて14の初演曲が用意され、中にはタンプール、南アフリカ民族楽器、パーカッションなどの共演曲も委嘱されるなど、まさに弦楽四重奏作品の最先端も感じる事が出来る。

今回のヒエンナレは2028年1月29日から2月5日に開催される。今年の大坂国際室内楽コンクールの優勝団体も出演予定なので、弦楽四重奏の最前線を体感し欲し。

### 弦楽四重奏曲第13番 変ロ長調 Op.130 (終楽章《大フーガ》Op.133付き)

ガリツイン公のための第3作となるこの作品でベートーヴェンは楽章数を6楽章へと拡張している。現在、Op.130の第6楽章は1826年11月に作曲した新しい終楽章が決定稿となっているが、最近の演奏会ではオリジナルの終楽章《大フーガ》Op.133を使うことが多くなっている。

**第1楽章 Adagio ma non troppo 変ロ長調 4分の3拍子**  
～Allegro 4分の4拍子～Tempo primo 4分の3拍子。

緩急そして拍子も頻りに変化し、また目まぐるしく転調する複雑な、しかし、精緻なテクスチャーによる展開。

**第2楽章 Presto 変ロ短調 2分の2拍子～4分の6拍子。**

2拍子系のリズムだが、実質はスケルツォで、8小節のペリオード構造で進展し、変化に富んだ和声が聴かれるが、基本的には変ロ短調と変ロ長調の楽段が交互に配置されている。

**第3楽章 Poco scherzoso Andante con moto ma non troppo 変ニ長調 4分の4拍子。**

少しおどけて、と指示されているが、全体には人懐っこく親しみやすい主題による穏やかな緩徐楽章となっている。

**第4楽章 Alla Danza tedesca ト長調 8分の3拍子。**

素朴な田園風情のドイツ舞曲。

**第5楽章 Cavatina Adagio molto espressivo 変ホ長調 4分の3拍子。**

初演時から大好評を得たこの楽章について、ベートーヴェン自身が「思い出すだけでも涙があふれてくる」と語った感動的な66小節の音楽となっている。

**第6楽章 Grosse Fuge Overtura Allegro 8分の6拍子～Meno mosso e moderato 4分の2拍子～Allegro 変ロ長調 4分の4拍子～Fuge。**

全741小節に及ぶ終楽章は当時『一般音楽新聞』(1826年5月10日号)で「フーガ様式で書かれたフィナーレの趣意を解釈する勇氣はない。筆者には、中国語のように不可解だった」と評されている。オヴェルトゥーラはイ短調四重奏曲Op.132の第1楽章とも共通する半音進行と減7度や短6度の跳躍音程の組み合わせからなり、これがメノ・モッソで4分音符に整えられた後、アレグロのフーガ主題となって発展する。主題の拡大、縮小、反行そして二重フーガなどのさまざまな技法で展開される大小7部分からなる。

### 弦楽四重奏曲 第14番 Op.131 嬰ハ短調

創作生涯の最晩年に全身全霊を込めた最後の作品群、5曲の弦楽四重奏曲を成立順に並べると、4楽章から5、6、7楽章へと楽章数を拡張し、最後の作品で4楽章に戻っている。しかし、この「嬰ハ短調」四重奏曲の7区分は従来の楽章とは別次元のものであり、ベートーヴェン自身が付けた楽章区分Nr.1～Nr.7の各部分が連続して演奏される。各部分の規模は、Nr.3が11小節、Nr.6が28小節と極端に短いので、これらを後続楽章への序奏部とみなす解釈も可能かもしれない。また、Nr.1のAdagioをNr.2のAllegroの序奏部とみる解釈も散見されるが、121小節の規模をもつNr.1を198小節の規模のNr.2の序奏部とする解釈は作品の本質を見損なっている。なぜなら、開始Adagioがもつ四重奏曲全曲に関わる重要な主題機能を軽視することになりかねないからだ。全7楽章の調では開始の二つの楽章調で示される半音関係が主題動機と共に重要な和声連結を象徴している。第1楽章「嬰ハ」は第2楽章「ニ」に対する導音の機能を持ち、第1楽章終止「嬰ハ↑嬰ハ」オクターヴ上行は第2楽章開始「ニ↑ニ」のオクターヴ上行への解決進行の象徴であり、ふたつの楽章を連結している。この導音→主音進行は第1楽章冒頭4小節で呈示される第1主題前半2小節の動機音形4音「嬰ト①-嬰ロ②-嬰ハ③-イ④」中でも楽曲開始早々の異例のクレッシェンド「嬰ロ→嬰ハ」で強調されている。この4音が形を変えて第7楽章開始主題6音中の後半4音「嬰ハ-ホ-嬰ト①-イ④-嬰ハ③-嬰ロ②」に使われていることを見落としてはならない。第1楽章と第7楽章間の有機的関連を保証する開放的循環形式の特殊な構成となっている。

**I (no.1) Adagio ma non troppo e molto espressivo**  
嬰ハ短調 4/4拍子 (121小節)

**II (no.2) Allegro molto vivace 二長調 6/8拍子 (198小節)**

**III (no.3) Allegro moderato イ長調 4/4拍子 (11小節)**

**IV (no.4) Andante ma non troppo e molto cantabile**  
イ長調 2/4拍子 (277小節)

**V (no.5) Presto ホ長調 2/2拍子 (498小節)**

**VI (no.6) Adagio quasi un poco andante 嬰ト短調 3/4拍子 (28小節)**

**VII (no.7) Allegro 嬰ハ短調 2/2拍子 (388小節)**

#### 平野 昭 (音楽学・日本ベートーヴェンクライス代表)

1949年生まれ。武蔵野音楽大学大学院修了。沖縄県立芸術大学、静岡文化芸術大学、慶應義塾大学文学部教授を歴任。専門は西洋音楽史、特にバロック以降の音楽様式研究。評論活動では「毎日新聞」「音楽の友」等紙誌への執筆、NHK音楽番組への出演等。主要編著:『作曲家◎人と作品 ベートーヴェン』『ベートーヴェン:革新の舞台裏』(音楽之友社)、『ベートーヴェン大事典』(平凡社)、『ベートーヴェン事典』(東京書籍)他。

モンゴル伝統楽団

テンゲル・アヤルグーの軌跡

河井拓 大阪国際室内楽フェスタプロデューサー



大阪国際室内楽フェスタ2023でメニューイン金賞を受賞したテンゲル・アヤルグーが、日本ツアーのために再来日。グランプリ・コンサートに至るまでの彼らの足跡、そしてツアーの様子をお伝えする。

©Chikara Kuriyama

フェスタの聖地 住友生命いずみホールに再び舞い戻るモンゴル楽士

テンゲル・アヤルグーの足跡

「モンゴル」と聞いて、思い浮かべるイメージは、何だろっか。馬が駆け回る大草原、移動式住居のゲルを中心に羊を放牧する遊牧民。または20年以上に亘り角界を席卷するモンゴル人力士を思い浮かべる方は多いはず。

音楽文化「目」を向けると日本でも最も馴染みなのは、小学校の教科書で採用された「スーホの白い馬」で有名な馬頭琴という楽器だろう。日本では音を聴く機会が少ない割に名前が有名な馬頭琴だが、実はモンゴルには馬頭琴以外にも伝統的な楽器が数多く存在し、演奏が紡がれてきた。その中には歴史の変遷の中で廃れてしまった物もあれば、60年以上の社会主義国時代の中で、ソ連の影響で独自の進化を遂げた楽器もある。(モンゴルの伝統楽器については、前号で紹介されているのでご覧あれ)

かつては遊牧生活の中で身近だった伝統楽器だが、今では大学での指導体系も確立していながらも、90年代の民主化以降に西洋の文化やエンタメが加速度を増して流入し、人々と伝統音楽の距離感が広がっていた。

1997年にモンゴル国立文化芸術大学で学んだ伝統楽器の継承者5人によって、テンゲル・アヤルグーが結成されたのはそのような状況下だった。以来5人は楽器の進化(変化)も受け入れつつ、古来の伝統的な奏法の研究・普及、そして埋没してしまった楽器や音楽の蘇演を通して、モンゴル伝統音楽を国内外で発信し続けた。

初来日は2005年の愛地球博におけるモンゴル館での演奏だった。初めて訪れる日本は何もかもが祖国とは異なり驚くばかりだったが、そこで出会ったホルローニャムハヤル氏(日本に帰化されて新山勝也氏のサポートを得て来日を繰り返すようになる)。

結成以来、幾度かのメンバー交代はあったが、創設メンバーであるツェヘグスレン・ツェレンハルシル(リンハ)、バタルチハトオルジフ(ヨーチン)、ジュルメトドルジノルドグ(ヘルブレイ)は今や大学で指導する立場にもなり、テムジン・プレフ(馬頭琴)とムンフエルテネエルデネハト



大好きなラーメンはスープも飲み干す

のラーメンを平らげたであろう。

この食の太さは、ただ食欲のままに食っている訳では無い。モンゴルの厳冬を生き抜く為でもあろうが、伝統的な演奏、特に重厚で良く鳴り響くホーミーを発声するためには、一定以上の体格が求められるという事である。

来日後は久しぶりの日本という事で意識的に和朝食などを選択して魚を食っている様子も見受けられたが数日後には「やっぱり肉を食へないと調子が上がらない」と、途中からは意識的に肉を食へる姿が見受けられ、体格を維持するアーティストの責任感を垣間見た。

また、ホーミーをメインに担当するジュルメトドルジとテムジンは元々師弟の関係。ホールの楽屋でピアノを見つけては、ジュルメトドルジの弾くピアノで2人で発声練習と訓練を行う姿も見受けられた。プロフェッショナルの音楽家になってからも、日々切磋を怠ることない姿を見せられた。

また、モンゴルでは生活に欠かせない動物には敬意を払っており、特に馬は国家の七つの宝の一つとされている。それは馬頭琴のヘッドに彫られた馬の彫刻であっても同様で、彫刻部分を地面に付けることは不敬にあたり、楽器がケースにしまわれた状態で、

でも床に寝かせずに、ヘッドは椅子や机に立てかけて保管する徹底ぶりだった。



馬頭琴はケースに入れられても、馬(ヘッド)は決して床に付けない

(ハス馬頭琴)はかつての生徒である。精力的な活動を継続する彼らに曲を捧げる作曲家も多く、結成から30年近くたった今では、モンゴル伝統音楽の第一人者として目されるまでになった。

フェスタへの挑戦

フェスタへの挑戦を意識したのは2019年。楽団リーダーのバダル氏は、当時大学では総合芸術監督(実質上のナンバー2)を務めており、学長室での会議に参加した際に、無造作に置かれていたフェスタの募集要項を目にした。最初は一般的なクラシック音楽のコンクールかと思いが、読み込むと民族楽器も参加できるフェスタ部門に目が留まり、メンバーに相談。直ぐに応募する意思を固めた。

しかし、先立つ2017年の第9回フェスタにもモンゴルからモリンホールケアルテット(馬頭琴四重奏団)が参加していたが、1次ラウンドを突破することが出来ていなかった。大阪国際室内楽フェスタのレベルの高さと、次ラウンドのための票を集めることの難しさを彼らから学び、入念なプログラムと作戦を組むために、過去の入賞団体の動画を視聴して研究を重ねた。

「口を禍を挟んで開催された予備審査は無事に通過して、2023年5月に待望のフェスタ参加のため来日。1次ラウンドでは三重県文化会館だった。移動日とリハーサル日で時間に余裕のあるメンバーは、内陸国のモンゴルでは体験することの出来ない海を見に行つた。5月は海水浴のシーズン前で気温・水温は低いとはいえず、厳冬のモンゴルからすれば暖かいもので、5人は浜辺から少し海水に入つていった。そこで彼らの目の前に、日の光が反射した金色に輝く水底が現れた。自然を崇拜するモンゴル人たちは特別な啓示を感じ、自分たちの前途に特別な加護を覚えたと言つた。



三重では2,000席の大ホールで演奏を披露

会場の空気を一変させる音楽

それから2年、テンゲル・アヤルグーのツアーの年がやってきた。11月3日にメンバーは再来日、モンゴルから成田空港に到着した。日本では冬の到来を思わせる時期で薄手のコートで羽織る人が目立つが、メンバー20度のランパートルから到着した一行にとっては軽く汗ばむほどの気候で、Tシャツでも丁度良さそう。到着後はそのまま最初の公演地である富山県高岡市に移動となった。



公演衣装はモンゴルの戦衣装からデザインしている

その後のフェスタでの彼らの活躍は既報の通り。全そのラウンドで最多票を獲得して、誰もが納得するメニューイン金賞、そしてフォークロア特別賞、オンライン聴衆賞を受賞して、2025年のグランプリ・コンサートへの出演権を得た。

クが加わり、楽曲の持つ神秘的なストーリーが聴衆の心にダイレクトに染みわたってくる。用意したレパートリーはテンゲル・アヤルグーを代表する音楽、モンゴル伝統の長唄、各楽器に焦点を当てた曲、唱者の腹の底から響き渡るホーミー、まるでモンゴル全土を旅しているかのような楽曲、自然や動物を讃える賛歌など幅広く、コンサートを聴きながらもモンゴルの風土、気候、歴史、文化、人々などを疑似体験できるような90分が繰り広げられた。そこで奏でられる力強いリズムや寂寥感を感じるメロディは、聴衆の琴線に刺れて涙を浮かべる方もいたようだ。

コンサートの後は開演前とは打って変わって、熱気あふれる来場者がロビーで語り、モンゴル資料の馬頭琴に触れればかりに顔を近づけて見学し、テンゲル・アヤルグーのCDを買い求めんとする行列が出来ていた。

信仰とプロフェッショナルリズム

テンゲル・アヤルグーのメンバーはとにかく体が大きい。それは小柄の力士を思わせるような体格

が一変することになった。テンゲル・アヤルグーの奏でる音はなぜか日本人にとって懐旧の調べであり、ツアーに同行した新山氏の味わい深いト



©Chikara Kuriyama  
新山勝也氏のトークも公演に深みを持たせる



©Chikara Kuriyama

熱演を繰り広げるテンゲル・アヤルグー

コンサートを聴けていない読者に音楽を届けられずに残念だが、大阪公演の様子は読売テレビの特別番組で放送され、読売テレビのYouTubeアカウントでも配信されている。日本室内楽振興財団のウェブサイトやSNSなどからもアクセスできるのでご覧あれ。

また、各楽器の演奏やホーミーの歌唱を間近で撮影したビデオも、日本室内楽振興財団のYouTubeで紹介している。日本では滅多に目にする事の出来ない楽器の実演なので、ぜひ視聴して欲しい。

大地を震わせるホーミー重唱。  
2人で4つ以上の音を発している。



馬頭琴演奏の手法



ユネスコの無形文化遺産にも登録されている  
リンベの循環呼吸演奏



何世紀も形を変えずに吹き継がれるツォール。  
一人で3音を奏でる驚異の奏法。



# Felix Mendelssohn メンデルスゾーンとスコットランド



トロサックスの自然

20歳のメンデルスゾーンが訪れた霧と伝説の地、スコットランド。二つの傑作のインスピレーションの源となった、廃墟の静寂と荒々しい北の海が生んだ旅の記憶を辿ります。

## 廃墟の礼拝堂で得た靈感と《スコットランド交響曲》

銀行家の息子として何不自由なく育ったフェリックス・メンデルスゾーンですが、父アブラハムは息子が音楽家として生きるならば、自らの腕で生計を立てられるプロであることを証明しなければならぬと考えていました。このような父の意向もあり、20歳になったメンデルスゾーンは武者修行の旅に出ます。1829年、彼が最初の目的地に選

んだのはロンドン、そしてスコットランドでした。ロンドンでの演奏会を成功させた後、彼は友人の外交官カール・クリンゲマンと共にスコットランドへ向かいます。当時、大陸では伝説の詩人オシアンの叙事詩や、ウォルター・スコットの歴史小説が流行しており、メンデルスゾーンもこの荒涼とした北の地に強い憧れを抱いていました。

7月末、エディンバラに到着した彼らは、街を見下ろす岩山「アーサーの玉座」に登り、その絶景に感嘆します。しかし、この



アーサーの玉座



ホリールド宮殿の廃墟。屋根が抜け落ち、空が広がっています。

街でメンデルスゾーンの創作の魂を最も深く揺さぶったのは、薄暗い廃墟の静寂でした。7月30日の夕暮れ時、二人は悲劇の女王メアリー・ステュアートゆかりのホリールド宮殿の廃墟を訪れます。宮殿に隣接する礼拝堂は屋根が崩れ落ち、草やツタが生い茂る廃墟となっていました。朽ちた祭壇の前に立ったメンデルスゾーンは、その日のうちに家族への手紙にこう

記しています。「すべてが壊れ腐り果て、明るい空が中へ照りつけている。今日、この古い礼拝堂で、僕のスコットランド交響曲の始まりを見つけた。彼が書き留めた十数小節の旋律こそが、後に13年の歳月をかけて完成する《交響曲第3番「スコットランド」》の冒頭主題となったのです。導入部だけでなく、荒々しいスケルツォや「戦闘的（Allegro guerrier）」と当初記された終楽章に至るまで、彼がこの地において肌で感じた情緒と歴史の記憶によって貫かれています。

## 荒れる海とフィンガルの洞窟 《ヘブリディーズ》の旋律

エディンバラを後にしたメンデルスゾーンとクリンゲマンは、さらなる「オシアン」の世界を求めて北上し、西海岸のヘブリディーズ諸島を目指しました。その旅のハイライトは、スタッファ島にあるフィンガルの洞窟を見ることでした。8月7日、彼らは蒸気船でマル島のトバモリ

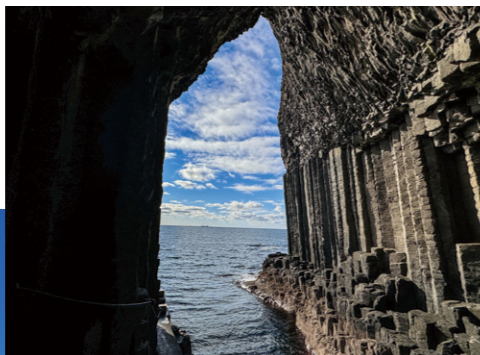
に到着します。その夜、メンデルスゾーンは実家に宛てて、ヘブリディーズ諸島がいかに素晴らしい場所か、そして自分がどんな印象を抱いているかを伝えるため、手紙の中に21小節の譜面を書きつけました。驚くべきことに、このスケッチは、実際にフィンガルの洞窟を見る前日に書かれています。荒涼とした海岸線、鉛色の海、そして心の中に描いていたオシアンの伝説的な風景が、洞窟を見る前からすでに彼のなかで音楽となって鳴り響いていたのです。その音楽は、寄せては返す波のうねりや、冷たい海風を見事に表現しています。これが後に演奏会序曲《フィン

ンガルの洞窟》となる主題でした。翌8月8日、二人はついに小舟でスタッファ島のフィンガルの洞窟へ向かいます。しかし、その道中は過酷なものでした。激しい船酔いに襲われたメンデルスゾーンは、船内で完全にダウン。クリンゲマンの記録によれば、「洞窟内部は巨大なオルガンのようであり、黒い玄武岩の柱が並ぶ様は圧巻でしたが、メンデルスゾーンにとっては辛い記憶となりました。それでも、この強烈な体験は、数年にわたる推敲を経て、完璧な芸術作品へと昇華されました。彼は後にこの曲の改訂にあたり、「対位的な技巧の匂いを消し、カモメと鯨油の匂いがするようになりたい」と語っています。

「ヘブリディーズ諸島を後にした二人は、グラスゴーを経て、最後の目的地であるローモンド湖やトロサックス地方へと向かいました。旅の終盤、スコットランドの自然は彼らに牙を剥きます。木々が倒れ、岩が崩れるほどの大雨に見舞われ、新聞が連日その被害を報じるほどの悪天候でした。しかし、文明から隔絶された荒野の中で、二人の若者の心はむしろ解き放たれていました。メンデルスゾーンは両親への手紙で、この時の様子を生き生きと伝えています。「僕たち二人は本当に楽しい時間を過ごした。笑い合い、スケッチし、食べられるものはすべて食べ、大自然に向かって大声で叫び、毎日12時間泥のように眠った。」

大井 駿（文&写真）  
指揮者、ピアニスト、古楽器奏者、1993年、東京都出身。第1回ひろしま国際指揮者コンクールにて優勝。第21回ハチャトゥリアン国際コンクール指揮部門第2位、古典派交響曲ベストパフォーマンス受賞。パリ、ミュンヘン、ウィーン、ザルツブルク、バーゼルにて、ピアノと指揮と古楽を学ぶ。読売日本交響楽団、東京都交響楽団、広島交響楽団、モーツァルテウム管弦楽団等と共演。

スタッファ島、フィンガルの洞窟（内部より）



スタッファ島、フィンガルの洞窟



マル島の荒廃した風景



ローモンド湖

### ■ 2025(令和7)年度 第2回理事会

開催：2026年3月5日(木) ホテルニューオータニ大阪  
承認事項：① 2026(令和8)年度事業計画及び収支予算書、資金調達及び設備投資の見込み、公益目的事業の種類又は内容  
② 2025(令和7)年度臨時評議員会の招集と議題  
報告事項：会長、理事長、常務理事の2025年度の職務執行状況

### ■ 2025(令和7)年度 臨時評議員会

開催：2026年3月24日(火) ホテルニューオータニ大阪  
承認事項：① 2026(令和8)年度事業計画及び収支予算書、資金調達及び設備投資の見込み、公益目的事業の種類又は内容  
② 評議員1名の選任  
新任評議員：人羅隆史(アサヒビール株式会社)

### ■ 2026(令和8)年度 助成金交付予定事業

2026年度の助成金交付事業を決定する選考委員会を1月27日(火)に開催し、厳正な審議の結果、11件が採択されました。

- ① Ensemble Amoibe Vol.64
- ② 光と夢の器 ― 福井麻衣と仲間たち ハープ室内楽の夕べ
- ③ 第6回芦屋国際音楽祭
- ④ 田中吉史・成本理香2人展「なぞる音楽」
- ⑤ イザイの詩曲 シリーズ vol.2 日本・ベルギー友好160周年記念
- ⑥ 葵トリオ 室内楽マスタークラス
- ⑦ プロジェクトQ・第24章～若いカルテット、メンデルスゾーンに挑戦する
- ⑧ Cabinet of Curiosities 2027 Alternatives in New Music
- ⑨ QUARTET BIENNALE YOKOHAMA 2026
- ⑩ クラシック・サロン《ひすとりあ音楽塾》
- ⑪ 直方谷尾美術館 第63、64、65、66回室内楽定期演奏会

#### 選考委員

委員／青澤 隆明(評論)  
宇野 文夫(作曲家・神戸学院大学教授)  
三枝 まり(小田原短期大学准教授)  
沼野 雄司(桐朋学園大学・大学院教授)  
横原 千史(評論) (委員名50音順)

### ■ 2027(令和9)年度 助成金募集について

募集開始：2026年9月1日(火)  
募集締め切り：2026年10月31日(土)  
お問い合わせ：公益財団法人 日本室内楽振興財団  
電話 06-6947-2183  
詳細は8月頃、ウェブサイト(https://jcmf.or.jp/)で発表予定です。

## 公益財団法人 日本室内楽振興財団 支援企業

大阪ガス株式会社	住友生命保険相互会社	カナデビア株式会社	非破壊検査株式会社	株式会社JTB
関西電力株式会社	大樹生命保険株式会社	川崎重工株式会社	株式会社電通	株式会社電通
住友電気工業株式会社	東京海上日動火災保険株式会社	株式会社クボタ	大塚製薬株式会社	株式会社ニュー・オータニ
ソニーグループ株式会社	日本生命保険相互会社	ダイキン工業株式会社	住友化学株式会社	
株式会社東芝	野村證券株式会社	日本製鉄株式会社	積水化学工業株式会社	KDDI株式会社
日本電気株式会社	アサヒビール株式会社	三菱重工株式会社	武田薬品工業株式会社	NTT西日本株式会社
パナソニック ホールディングス株式会社	サントリーホールディングス株式会社	株式会社日建設計	日本ペイント株式会社	株式会社読売新聞大阪本社
株式会社日立製作所	ハウス食品グループ本社株式会社	株式会社大林組	近畿日本鉄道株式会社	株式会社読売新聞東京本社
富士通株式会社	東洋紡株式会社	株式会社鹿島建設	京阪電気鉄道株式会社	日本テレビ放送網株式会社
ローム株式会社	株式会社ワコール	株式会社きんでん	株式会社NANKAI	読売テレビ放送株式会社
株式会社関西みらい銀行	株式会社三井住友銀行	株式会社清水建設	西日本旅客鉄道株式会社	(関連業種別 五十音順)
株式会社みずほ銀行	伊藤忠商事株式会社	大成建設株式会社	阪急電鉄株式会社	阪神電気鉄道株式会社
株式会社三井住友銀行	岩谷産業株式会社	大和ハウス工業株式会社		
株式会社三菱UFJ銀行	株式会社社千趣会	株式会社竹中工務店		
株式会社りそな銀行	三菱商事株式会社			

#### メールで最新情報をお届け! 奏メールメンバース

室内楽をますます楽しんでいただけるような情報を不定期でメール配信中! 一部主催公演でのご招待や割引情報もご案内します。ぜひご登録ください!



## ザ・フェニックスホールに集う

# トップアンサンブル シリーズ 2026-2027

## 躍動するライジング・スター

2026年シーズンのトップアンサンブル シリーズでは、弦楽四重奏界のニューウェーブが登場。ロンドンとボルドーのコンクールで認められた北欧の新星Opus13。欧州中から演奏依頼が絶えない、団内に人気作曲家を有するカルテット・インダコ。そして真摯な音楽づくりに定評のある日本の新星ほのカルテット。各国のライジング・スターに加えて、第12回大阪国際室内楽コンクールで審査委員も務める韓国音楽界の第一人者サンウォン・ヤンも来援します。3団体が共に奏でるのは、弦楽器サウンドの匠メンデルスゾーン。洗練されたアンサンブルによる熟演をお届けします。

2026  
**6/27(土)**  
15:00開演

**Opus13**  
**オーパス・サーティーン** (ノルウェー/スウェーデン)  
2025年 第11回ボルドー国際弦楽四重奏コンクール第1位 / ウィグモアホール国際弦楽四重奏コンクール第1位  
ボルドー国際弦楽四重奏コンクール提携公演

© Elvira Glänté

### The Origin

近年、突如として頭角を現した北欧の新星が、団体のDNAたる音楽を披露。結成のきっかけのメンデルスゾーンの第2番 (Opus 13)、スウェーデンが世界に誇るビューストレムの幽玄な世界、そしてグリーグの情熱溢れる音楽を奏でます。

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 第2番 イ短調 op.13  
ブリッタ・ビューストレム：浮遊する世界からの印象 (Images From The Floating World)  
グリーグ：弦楽四重奏曲 ト短調 op.27

園子ミリアム・ヴェルデ(ヴァイオリン) / エドヴァルド・アールダル(ヴァイオリン)  
アルビン・ウーシャルヴィ(ヴィオラ) / ダニエル・トレル(チェロ)

2026  
**10/25(日)**  
15:00開演

**Quartetto Indaco with Sung-Won Yang**  
**カルテット・インダコ** (イタリア)  
**with サンウォン・ヤン**  
大阪国際室内楽コンクール2023第1位

© Lucia Ottolini  
© Jean Lim

### 交歓するアジア・ヨーロッパ

気鋭のイタリアの弦楽四重奏団が韓国のトップチェリストを迎えて、シューベルトの不朽の大作に挑戦。また作曲家でもあるインダコのチェリスト カロヴァニが、稲荷大社で受けた幻想的なインスピレーションを、弦楽四重奏曲で顕現させます。

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲第5番 変ホ長調 op. 44-3  
コジモ・カロヴァニ：稲荷大社のうつろい (the fading of Inari Taisha) ※日本初演  
シューベルト：弦楽五重奏曲 ハ長調 D956

エレオノラ・マツノ(ヴァイオリン)  
イダ・ディ・ヴィータ(ヴァイオリン)  
ジャミアング・サンティ(ヴィオラ)  
コジモ・カロヴァニ(チェロ)  
サンウォン・ヤン(チェロ)

2027  
**1/31(日)**  
15:00開演

**HONO QUARTET**  
**ほのカルテット** (日本)  
大阪国際室内楽コンクール2023第2位

© Makoto Nakagawa

### 進化し続ける日本の新世代

日本の新世代 ほのカルテットが登場。オーケストラやソリストなどマルチで活躍するメンバーながら、自己が選ってくる場所としてひたむきに取り組む室内楽は、毎回新たな発見と、音楽的躍進に満ち溢れています。

ハイドン：弦楽四重奏曲 ハ長調 op. 20-2  
メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 第6番 ヘ短調 op. 80  
ブラームス：弦楽四重奏曲 第3番 ヘ長調 op. 67

岸本萌乃加(ヴァイオリン) / 林 周雅(ヴァイオリン)  
長田健志(ヴィオラ) / 蟹江慶行(チェロ)

### プレトーク

各公演の開場時間14:40-14:50に、本シリーズのプロデューサーや出演者によるプレトークを行います。コンサートをより楽しめるよう、出演アンサンブルやプログラムの魅力をお伝えします。



#### 【チケット】全席指定 発売中

※セット券、学生券はザ・フェニックスホールチケットセンターのみ取り扱い(学生券は25歳以下、要学生証提示)

公演	一般	友の会	学生 (25歳以下)	セット券	セット券 (友の会)
① Opus13	¥5,000	¥4,500	¥1,500		
② インダコ with サンウォン・ヤン	¥6,000	¥5,400	¥1,500	¥13,000	¥11,500
③ ほのカルテット	¥4,000	¥3,600	¥1,500		

#### チケット取扱

●ザ・フェニックスホールチケットセンター 06-6363-7999  
●チケットぴあ https://t.pia.jp ●イープラス https://eplus.jp

#### 会場

あいおいニッセイ同和損保  
**ザ・フェニックスホール**  
〒530-0047 大阪市北区西天満4-15-10  
あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー内